

地域の福祉課題に対応した 新しい保育サービスの実践

社会福祉法人ゆずり葉会 理事長
吉田保育園 園長 平澤 正人

1. 施設及び所在地域(新潟市)の紹介

新潟市は、古くから「みなとまち」として栄え、明治22年(1889年)に市制が施行された。1年後の明治23年に、この新潟市において、日本最初の保育園「赤沢保育園」が設立されたことをご承知の方も多いと思う。創始者である赤沢鍾美氏が新潟静修学校を開設し、そこに通う塾生が背負ってくる幼い子どもの世話を同氏の妻に任せたことが、わが国の託児保育所のはじまりとされている。これを発展させ、労働等で保育に欠ける子どものお世話をする保育園の歴史が始まったことになる。

また、広大な新潟県は明治20年代の初めまでは、全国一の人口を誇っていた。県庁所在地である新潟市は、近隣市町村との合併により人口約80万6,500人となり、平成19年4月本州日本海側初の政令指定都市となり、今日に至っている。

市内には8区の行政区があり、当園は、文教地域と言われる西区にあり、日本海の向こうに佐渡を見おろせる西小針台の高台に位置している。昭和44年に乳児保育を専門としてスタートし、「産休明けから就学までの一貫した保育」を基本理念として、同法人の2つの保育園が、お互いに連携しながら運営してきた。吉田乳児保育園は、県内における乳児保育のパイオニアとして3歳未満児を担

当し、吉田保育園は3歳以上児の専門保育を担当している。

当園は、何事にも興味を持ち、積極的に取り組む「意欲ある子どもを育てる」を目標として一連の保育活動を展開している。また、「感動を与える保育」をモットーに「意欲」、「情熱」を大事にし、子どもの能力を最大限に生かす保育を心掛けている。実体験から学ぶことを重視し、園外保育等を積極的に実施している。さらに、日常保育では子どもの能力を最大限に生かすため、絵画や制作などの創作活動、充実した楽器による音楽演奏などの情操教育、英語学習などにも力を入れ、豊かな感性を育てることを目指している。

2. 多様な保育サービスの提供

昭和44年に当地寺尾地区の砂丘地に当園が設立されて以来、この地域もすばらしい発展をとげ、正に文教地域の名にふさわしい環境条件が整った。設立当時の社会的風潮は、「育児は母の手で」を理想とするような傾向もあったが、「あらゆる可能性を目指して」を合言葉として色々な分野に挑戦してきたのが当園の歴史である。地域の発展と共に歩みながら、周囲の生活環境の変化と多様な保育ニーズに対応すべく、地域の人々に多様な保育サービスを提供してきた。

設立以来重点的に取り組んできた「乳児保育」、「延長保育」等は、時代の流れにより今や広く普及定着したものとなった。そして、障害児保育、一時預かり(拠点園)等についても、常に積極的に取り組んできた。人間は、義務的にやらねばならないとなると拒否したくなる部分もあり、また、他人から担がせられる荷は重いが自分で担ぐ荷は軽い(重くない)ということもある。そんなこともあり、地域の福祉課題に対しては、当園の持てる力の範囲内で早期かつ積極的に対応してきた。

数年前から当地域における課題として、「病児・病後児保育」と「休日保育」があった。病児・病後児保育には多くのニーズがあり、重要な課題であることは間違いないのであるが、それだけに厳しい条件が求められる面もある。新潟市の方針や考え方からすると実現は難しいと考えてしまうが、取り敢えず、「病後児の保育」について設備、環境、スタッフの面で今まで以上に充実させ、より丁寧に対応することにした。そして、もう1つの「休日保育」については、かなり前から研究してきた課題であり、また身近でかつ切実な課題でもあった。また、新潟市内全体を見ても、確実にニーズがあることから、「休日保育実施保育園」として、数園が「休日保育」を正式にスタートした。

市の保育施策として、8区の行政区全てに1園以上の配置が目標であった。ところが、新潟市の全人口約81万人のうちの約20%に当たる約16万人を有する当西区には平成23年度迄、休日保育実施園が1つもなかったのである。それには様々な要因があるが、一般論として言えることは、「初めてやることに対しては、いつでも反対する人がいるものだ」という面はある。しかし、当園の場合は、

割とスムーズに事が運んだ。人口約16万人という1つの中核市にも匹敵するような西区において、休日保育実施園が是非とも1つは必要だということに関係者各位がよく理解していた結果だと考えている。しかし、実施するからには、当園のモットーとする「新しいものを創造する、開発的保育活動」を展開したいと考えいくつかの工夫を試みた。

こうして、平成24年4月1日日曜日、新潟市内で9番目、西区初の「休日保育実施保育園」がスタートした。因みに、当市の認可保育園数は、公私立合わせて218園であり、在園児童数は約2万人である。初日はちょっとした記念式典をやった上で、通常の休日保育を実施した。以来1年9か月が経過したが、利用のない日は1日もないという利用実績である。改めて言うまでもないが、対象児童は、「市内の認可保育園に入園している児童で、保護者の就労等により、日曜日・祝日にも保育を必要とする児童」であり、普段は別の保育園に通っている児童も利用できる。

3. 休日保育奮闘記

前述のとおり、普段は別の保育園に通っている児童も沢山利用しており、また、当園の児童の利用も沢山ある。他の保育園の児童からすれば、当園は正に「別の保育園」になる訳だが、実は当園の児童にとっても「別の保育園」になるのである。それは、普段の月曜から土曜の保育を実施する園舎とは、別の建物で休日保育を実施するからである。本園舎から徒歩約1分の所に通称「ニューヨシダキッズステーション」と称する休日保育用の別棟がある。つまり、利用する子どもたち全員にとって普段通っている保育園とは、「別の保



休日保育室（外観）



休日保育室で楽しく遊ぶ子どもたちの様子

育園」であり、別の環境・空間である。1週間以上連続して同一の空間を使用することを避けるだけではなく、子どもたちにとっては、限られた少人数で普段と違った特別の環境や設備を独占して、楽しむことができる新たな空間と、新たな集団となる人間関係の創造である。昔流に言えば、「休みの日くらい、日曜日くらいは、親が面倒を見るべきだ。休みの日まで預かるなんて……」などという声がない訳ではない。だが、日曜・祝日が特に忙しいという仕事の人もいれば、休みの日に仕事以外の大事な用がある人もいるのも事実である。少なくとも保育の選択肢の1つとして、存在意義は確実にあるものと考えている。実施してみると、やはり西区には休日保育が必要であったことがよく分かる。今迄もニーズは少なからずあったのだが、施設がないため、他の区の休日保育施設等を利用されていたということがわかった。親の仕事の都合、子どもの心理的な面、人間関係等様々な要素を総合的に考慮すれば、近くに利用できる施設があるに越したことはない。

以下、これまでの経過の中での所感、今後の課題等について整理する。

まず、職員が仕事に対する達成感と誇りを持てるようになったことは何とも有難いことである。やや大袈裟かも知れないが、職員自身が満足感と自信を持つようになった。正に地域の福祉課題に取り組んだことへの達成感であり、新しい福祉サービスを実践したことによる満足感である。社会に貢献するという誇りと満足感が、更なる前進への原動力となるのであろう。この積極的な流れの中から、更に新たな地域の福祉課題が見えて来るとも思われる。

当面の課題としては、安心・安全のためにも保護者との情報交換はもちろんのこと、他園から来る児童が在園する園との様々な情報交換が重要であると思われる。利用手順・規程等にも多少課題はあるが、保護者や子どもたちから「休日保育に行くのを楽しみにしている」というような声を聞く度に大変有難いことだと思っている。

そして、やはり西区内で休日保育を始めて良かったと感じているところである。これからは、当面の課題を解決した上で、子どもたちに新たな喜びを与えられるような内容を加えて行きたいと考えている。

4. 今後の展望

国家の発展は、将来を担う子どもたちが立派に育つことにかかっている。この世の中で、子どもの教育に携わることは、誠に幸福な事だと言えるのではないだろうか。今後、保育制度・保育施策には、様々な知恵と工夫が加えられていくことであろう。そして、基本的には、「親と子どもの真の幸福」を追求するという考えで、地域・社会に対して、多様な選択肢を用意することが必要になるのではないだろうか。ニーズそのものが多様な時代となり、そして、そのニーズに対応する選択肢を用意するのは正に人である。優秀な人材の育成が益々重要となってくる。そのためにも、我々施設長は施設のリーダーとして、進んで自己研鑽に励むことが重要である。正に「率先垂範」である。それにより、各々の職員は自分自身の置かれた立場で、自分に相応しい自己研鑽を積むような流れと環境をつくることになる。そして、修得した能力等を何らかの形で施設内において発揮して、社会に対して貢献することが大切なのであろう。それは常に「自己肯定感」を育むことにもつながり、更に新しい発展へとつながっていくものである。

ところで、当法人内には、私を含めて3人の「福祉施設士」がいる。折に触れて、職員にも「福祉施設士」という民間資格の意味や、日本福祉施設士会という組織についても説明している。園内には、会員表示板も掲示してあるので、それなりに認知もされているものと思う。今後は、全職員に自主的な研修も含めての自己研鑽の重要性について説いて、実践して行く。しかし、与えられる研修だけでなく、自ら求めて切り開いて取り組む研修も大事にして欲しいと考えている。当事者として問題意識を持って取り組む研修は極めて有効なものである。そのためには、実際に各々の職員に相応しい課題を与えることにより、早いうちに、施設が果たしている社会的役割の一翼を担っているという意識を強く持たせることである。それにより、全ての職員が地域・社会との関わりにおいて、施設の一員であるという明確な意識を持つことが重要である。仕事は心の持ち方次第で、過程も結果も変わるものである。常に喜びと幸せと感謝の気持ちを持ちながら、仕事に臨みたいものである。また、今日までの実績を大事にしながら、職員全員の力を結集して常に新しいニーズに挑戦する姿勢を持ち続けたいものである。